

その時、勤王志士・朝廷、
慶喜政権、江戸幕府らは、

西郷隆盛 大久保利通 薩摩藩 年表帖

上巻



ペリー来航から王政復古まで、時系列でわかる！

UnisPlan

目次

はじめに……………	2
目次年表……………	3～18
九州概略図・鹿児島県の離島図……………	19
維新期の日本国図……………	20
西郷隆盛・大久保利通・薩摩藩年表……………	22～247
主な参考文献……………	248
あとがき、奥付……………	256

はじめに～この本の使い方～

この本(上巻)は、嘉永6年(1853)ペリー来航による幕末の騒動(攘夷・勤王・佐幕騒動)から慶応3年(1868)12月9日の「王政復古」までを取扱っております。

この激動の時代、西郷隆盛、大久保利通をどうしていたのか、薩摩藩主、藩士の事歴、そして薩摩藩は如何に動いたのか、そして朝廷は、諸藩の勤王志士は、江戸幕府は、慶喜政権はと、その動静を編年譜で追っています。

既刊の龍馬・中岡慎太郎・土佐藩・新選組・江戸幕府中心の『幕末年表帖』、長州藩中心の『維新年表帖』(上巻)と合わせ御覧頂ければ、西南雄藩、徳川幕府等の動静等、その背景も垣間見えるものと思います。

一部を除き日付までを記載しています。なお、不明な月・日付に関しては「―」で割愛、または「夏」「下旬」などと表記している箇所もございます。ご了承ください。薩摩藩の動向や特に重要と思われる事項(歴史的流れのために必要と思われる事件等)は、太字で記載しております。

本体となる西郷どん・大久保利通・薩摩藩年表は226頁とそこそこの分量となっております。目次年表は、この期間を16頁に圧縮しており、その項目の掲載番号が記載されております。索引の一助となれば幸いです。

西暦 和暦	月日	出来事	No.
1809 (文化6)	3月14日	■島津斉彬(薩摩藩の第11代藩主、島津氏第28代当主)、第10代藩主・島津斉興の長男として江戸薩摩藩邸で生まれる。	0002
1817 (文化14)	10月24日	■島津久光、第10代藩主・島津斉興の五男として鹿児島城に生まれる。	0003
1820 (文政4)	7月10日	■喪が伏せられた伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』が完成。	0007
1824 (文政7)	7月8日	■英国捕鯨船、トカラ列島に属する薩摩藩領宝島に上陸。	0011
1825 (文政8)	2月18日	■幕府、異国船打払令発令。	0015
1827 (文政10)	12月7日	■西郷隆永(西郷隆盛)(通称は吉之助)、薩摩藩・御勘定方小頭の西郷九郎隆盛(西郷吉兵衛隆盛)の家に長男として生まれる。	0024
1828 (文政11)	11月23日	■「シーボルト事件」。和蘭商館医師シーボルト、禁制品(伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』)国外持出し発覚により、この日、長崎出島に拘禁される。	0027
1830 (文政13)	8月10日	■大久保正助(一蔵・利通)、琉球館附役の薩摩藩士・大久保次右衛門利世と皆吉鳳徳の次女・福の長男として生まれる。	0030
1830 (天保1)	12月10日	■江戸の大火や京都の地震などの災異のため、天保と改元。	0031
1833 (天保4)	1月15日	■島津氏第25代当主、薩摩藩の第8代藩主・島津重豪、江戸高輪邸大奥寢所にて死去。	0037
	6月11日	■和蘭人が海外風説書を江戸幕府に提出する。	0039
	—	■「天保の大飢饉」はじまる。翌年から天保8年(1837)にかけて最大規模化した。	0042
1835 (天保6)	10月14日	■肝付尚五郎(小松帯刀)、薩摩国喜入領主・肝付兼善の三男(四男とも)として生まれる。	0048
1837 (天保8)	2月19日	■「大塩平八郎の乱」起こる。	0061
	6月28日	■「モリソン号事件」。米船モリソン号が浦賀に出現、無二念打払い令(異国船打払令)により、砲撃を受ける。	0063
1838 (天保9)	2月19日	■幕府、諸国の大名・旗本の監視と情勢調査のために「巡見使」を送る。	0067
1839 (天保10)	5月15日	■「蛮社の獄」はじまる。	0073
	9月28日	■「アヘン戦争勃発」。	0074
1840 (天保11)	4月11日	■島津忠義、島津氏分家の重富家当主・島津忠教(久光)の長男として生まれる。	0076
1841 (天保12)	1月7日	■土佐国宇佐浦の漁民・中浜(ジョン)万次郎らの乗った漁船、土佐湾沖で遭難。	0081
	5月15日	■「天保の改革布令」。老中首座水野忠邦(遠州浜松藩主)、幕臣・在府諸大名に対し享保・寛政期への政体復古を宣言。	0088
	10月24日	■第9代藩主・島津斉宣、江戸の薩摩藩下屋敷にて死去。	0091
1842 (天保13)	6月21日	■幕府、アヘン戦争終結後、英国艦隊が開国を迫るとの情報を得る。	0094
	7月22日	■幕府(水野忠邦)、「異国船打払い令」を緩和し、「天保の薪水給与令」を制定。	0096
1843 (天保14)	3月26日	■「天保の改革一人返し令」。老中水野忠邦・幕府、他国出身者に帰郷を厳命。	0109
	5月14日	■西郷従道、生まれる。兄の西郷隆盛を「大西郷」と称するのに対し、従道を「小西郷」と呼ぶ。	0111

西暦 和暦	月日	出来事	No.
1843 (天保14)	閏9月11日	■阿部正弘(備後福山藩第7代藩主)、若干25才で老中就任。	0115
	閏9月13日	■腹心の鳥居耀蔵の寝返りで、水野忠邦、「天保の改革」の失敗の責めを負って老中を罷免される(天保改革終了)。	0116
1844 (弘化1)	12月2日	■弘化に改元。	0128
1845 (弘化2)	2月22日	■阿部正弘(備後福山藩第7代藩主)、老中首座就任。	0129
	3月11日	■米国捕鯨船「マンハッタン号」、日本人遭難者を引き渡しに来ていて、ようやく浦賀に来航。マンハッタン号は、平和裡に浦賀に入港した始めての米国船となる。	0131
	6月1日	■幕府、和蘭の開国勧告を拒絶。	0134
1846 (弘化3)	2月13日	■121代孝明天皇踐祚。	0140
	閏5月25日	■薩摩藩、琉球貿易の黙認を、江戸幕府に要請。	0143
	閏5月27日	■米国東インド艦隊司令長官ジェームズ・ビッドル、軍艦コロンバス号・ビンセンス号2隻を率いて浦賀に来航。	0145
	6月7日	■幕府、米国の通商要求を拒否。	0149
	8月8日	■幕府、異国船打払令復活を延期する。	0159
	8月29日	■朝廷、幕府に海防の御沙汰を命ずる勅書を下し、対外情勢の報告を求める(実に220年ぶりの幕政介入)。	0162
	10月3日	■幕府、京都所司代を通じて、朝廷に、諸国の軍艦が琉球・浦賀・長崎に渡来した状況を初奏上。	0165
	1月13日	■弘化3年(1846)より藩の記録所書役助として出仕した大久保一蔵(利通)、系図御家譜編集別勘改書役となる。	0178
1848 (嘉永1)	2月28日	■嘉永に改元。	0184
1849 (嘉永2)	12月3日	■お由羅騒動(高崎くずれ・嘉永朋党事件)。 ■大久保一蔵(利通)が、記録所助を免ぜられ謹慎。	0199
	12月5日	■幕府、打払令復活のため、諸大名に海防強化を命じる(海防厳重令)。	0200
1850 (嘉永3)	12月1日	■第10代薩摩藩主島津斉興、幕閣(老中阿部正弘)の圧力により隠居願いを提出。	0217
1851 (嘉永4)	1月3日	■漂流民中浜(ジョン)万次郎、薩摩藩領の琉球に帰国。薩摩藩は万次郎を長崎に送る。	0221
	2月2日	■島津斉彬(43才)、襲封。島津家28代当主、11代薩摩藩主就任。	0222
1852 (嘉永5)	—	■西郷吉之介(隆盛)、父母の勧めで伊集院直五郎兼善の娘、伊集院兼寛の姉・須賀と結婚。	0230
	9月29日	■西郷吉之介(隆盛)、家督を相続。	0239
1853 (嘉永6)	5月11日	■大久保正助(一蔵・利通)、「お由羅騒動」の罪を許され、記録所に復職し、御蔵役に任ぜられる。	0251
	6月3日	■「ペリー来航」。米国東インド艦隊指令官マシュー・ペリー率いる米国軍艦、4隻(蒸気船2隻、帆船2隻)の艦隊で浦賀に初来航。	0255
	6月19日	■幕府(阿部正弘)、軍艦7隻を蘭国から購入することを決定。	0264
	7月8日	■海防参与徳川斉昭、「十条五事」を幕府に建議し、軍艦、汽船の建造を和蘭へ注文し、又造船技師及び高級海員の招聘を説く。	0270
	7月22日	■松平慶永(春嶽)、営中にて島津斉彬と会し、共に一橋慶喜を将軍の継嗣となすに尽力せんことを約す。	0273

西暦 和暦	月日	出来事	No.
	8月21日	■江戸内海に11基の台場計画での築造始まる。	0283
	9月15日	■幕府、「武家諸法度」内の大船建造禁止令を解除。	0289
	10月23日	■家定に將軍宣下。徳川家定、第13代將軍に就任。	0296
	11月1日	■幕府、徳川斉昭と阿部正弘の連携で、「海防の大方針」を発布。	0297
	11月6日	■島津斉彬、軍艦15隻(内蒸気船3隻)の建造計画を立て、12月、幕府の許可を得る。	0299
1854 (嘉永7)	1月16日	■前年の予告通り、14日に輸送艦「サザンプトン」(帆船)が現れ、米国東インド艦隊司令官マシュー・ペリーが率いて、この日までに7隻の艦隊で神奈川沖に再来。	0312
	1月21日	■薩摩藩主島津斉彬、参勤のため江戸に向かう。西郷善兵衛(隆盛)27才、上書が認められ、「中御小姓・定御供・江戸詰」に任ぜられ、随行、初めて江戸に出る。	0314
	3月3日	■幕府、勅許を得られないまま約1ヶ月にわたる協議の末、神奈川の応接所において「日米和親条約(神奈川条約)」を締結。約200年間続いた鎖国政策は終わりを告げる。	0328
	3月27日	■吉田松陰と弟子金子重輔、下田で偽名を使い、米艦に乗船を求めるが断られる。	0331
	4月—	■この月、西郷善兵衛(隆盛)、薩摩藩庭方役となり、当代一の開明派大名であった島津斉彬から直接教えを受けるようになる。	0334
	5月25日	■和親条約の細則を定めた日米和親条約附録協定(下田条約13箇条)締結。蘭、露とも締結。	0345
	6月5日	■幕府、老中首座阿部正弘(備後福山藩主)の主導で「安政の改革」を開始。幕府三大改革といわれる享保の改革・寛政の改革・天保の改革に次ぐ改革といわれる。	0348
	7月9日	■幕府、島津斉彬と徳川斉昭の言を採用し、日の丸を日本惣船印とする事を決定する。	0354
	11月4日	■「安政東海地震」。駿河湾から遠州灘、紀伊半島南東沖一帯を震源とするM8.4という巨大地震が発生。	0371
	11月5日	■32時間後、「土佐大地震(寅の大変、安政南海地震)」起こる。	0372
	11月—	■貧窮を見かねた妻の実家・伊集院家が、西郷家から善兵衛(吉之助、隆盛)妻・須賀を引き取り、以後、二弟の吉二郎が一家の面倒をみる。	0373
1854 (安政1)	11月27日	■安政に改元	0374
1855 (安政2)	3月9日	■踏絵の制(切支丹宗取調のため二百年來の制度)、漸く廃せられる。	0387
	7月29日	■幕府、長崎西役所に「海軍伝習所」を設ける。	0400
	8月23日	■薩摩藩、江戸で日本初の蒸気船「雲行丸」、試運転成功。	0406
	10月2日	■「安政の大地震」、起こる	0413
	10月24日	■幕府海軍伝習所が長崎に開校。	0420
	12月12日	■西郷家の財政は一層窮迫した。西郷吉兵衛(隆盛)は、江戸在任中に下加治屋町の生家を売却し、4人の弟妹(すでに嫁いでいた長妹の琴と次妹の鷹を除く)は、上之園の借家に移る。	0422
1856 (安政3)	12月27日	■越前福井藩土橋本左内、薩摩藩土西郷吉兵衛(隆盛)らと会し、時事を議す。	0426
	7月21日	■日米和親条約の取り決めに従い、タウンゼント・ハリス、初代の駐米国総領事として下田に到着、会見を要求。	0449
	8月6日	■老中阿部正弘、交易互市を富国の大方針とすることを宣言。	0451
	9月10日	■「アロー事件」発生。第二次アヘン戦争に繋がる。	0455
	9月16日	■朝廷(武家伝奏)、所司代を無視し、水戸藩京都留守居・鶴飼吉左衛門に諮問。	0456
	9月25日	■第二次アヘン戦争勃発。	0458
	11月10日	■島津斉彬、藤原敬子(篤姫)に、一橋慶喜将軍就任に尽力を説得。	0466

■**島津齊興**^{なりおき}(1791～1859)、第9代藩主・島津齊宣^{なりのよ}(1774～1841)の長男として江戸で生まれる。生母の実家、鈴木氏は浪人であったため、齊興出生後に、藩と鈴木氏との間で諍いが起きている。文化1年(1804)10月に元服、江戸幕府の11代将軍・徳川家斉(1773～1841)より偏諱を賜って、初名^{ただよし}の忠温(ただはる/ただあつ)から齊興に改名。従四位下、侍従兼豊後守に叙任。

□文化6年(1809)6月、近思録崩れの責任を取る形で父・齊宣が祖父・島津重豪^{しげひで}(1745～1833)によって強制隠居させられたため、家督を継いで第10代藩主となった。しかし藩主になったとはいえ、藩政改革などの実権は重豪に握られていた。天保4年(1833)、重豪が89才で大往生を遂げるとようやく藩政の実権を握り、重豪の代からの藩政改革の重鎮・調所広郷^{しやうひろさへ}(1776～1849)を重用して、財政改革を主とした藩政改革に取り組んだ。藩政改革では調所主導の元、借金の250年分割支払いや清との密貿易、砂糖の専売などが大いに効果を現わし、薩摩藩の財政は一気に回復したが、嘉永1年(1848)幕府から密貿易の件で咎められ、責任者の調所は12月に急死した。齊興に責任を及ばさないために1人で罪を被り、服毒自殺したとされる。

□江戸幕府の11代将軍・徳川家斉^{いえなり}の正室(御台所)・広大院^{こうだいいん}(1773～1844)の実名は寧姫、篤姫、茂姫。後に天璋院が「篤姫」を名乗ったのは広大院にあやかったものという。

□御一門家(直系四家)は、重富島津家(大隅重富領一万四千石、一門家筆頭)、加治木島津家(大隅加治木領一万七千石、一門家二位の家格)、垂水島津家(大隅垂水領一万八千石、一門家三位の家格)、今和泉島津家(薩摩今和泉領一万五千石、一門家四位の家格、天璋院篤姫の実家)。

家老家は、日置島津家(薩摩日置領主九千石)、宮之城島津家(薩摩宮之城領主一万五千石)、帖佐島津家(大隅帖佐領主千七百石)、他、5家。

家老格家は、都城島津家(日向都城領主三万九千石)、平佐北郷家(都城島津氏の分家、薩摩平佐領主八千二百石)、知覧島津家(薩摩知覧領主、石高不明)、その他、永吉島津家、佐志島津家、新城島津家、花岡島津家。

その他の氏族は、種子島家(大隅種子島領主一万一千石)、肝付家(薩摩喜入領主五千五百石)、小松家(薩摩吉利領主二千六百石、平清盛の長男・重盛の直系氏族)、その他、入来院家、敷根家。

□薩摩藩士は、鹿児島城下に住む城下士^{じやうかし}と、外城^{とじやう}に住む郷士^{ごうし}に分かれていた。文政8年(1825)の記録によると、城下士8,791人、郷士83,567人。城下士は、島津本家の下に、御一門(一門家、島津四家)、一所持、一所持格(20家)、寄合、寄合並、小番、新番、御小姓^{おしょうぎみ}与という家格に分かれていた。寄合並までが上級武士で、小番以下が下級武士。城下士の下に、郷士、与力、足軽と続く。戦時には武士として戦闘に携わるが、通常は農民として農地の開拓・開墾を行う半士半農の性格を帯びていた。

□弘化3年(1846)頃では、御一門四家、一所持(29家)、一所持格(12家)、寄合(52家)、寄合並(10家)、以上は家老を出すことができる上士層。続いて、無格(2家)、小番(760家)、新番(24家)、御小姓与(6146家)、与力があり、さらにその下に准士分の足軽がいた。

□西郷家は御小姓与であったが、結婚当時、小松帯刀によって小番に昇格している。

0001



0002

■**島津齊彬**^{しまづ なりあきら}(1809～1858)(薩摩藩の第11代藩主、島津氏第28代当主)、第10代藩主・島津齊興^{なりおき}(1791～1859)の長男として江戸薩摩藩邸で生まれる。幼名は邦丸、初名は忠方。

□母・弥姫^{いよひめ}(周子^{かねこ})(1792～1824)は、「賢夫人」として知られ、この時代には珍しく、齊彬はじめ弥姫出生の3人の子供は乳母をつけず、弥姫自身の手で養育した。その英明さを買われたのか、4才の時に島津家当主の跡継ぎに指名されたという。また、青年期まで存命であった曾祖父第8代藩主・重豪の影響を受けて洋学に興味をもつ。これが周囲の目に蘭癖と映ったことが、皮肉にも薩摩藩を二分する抗争の原因の一つに

なったとされる。

□文化9年(1820)8月15日、薩摩藩世嗣となる。文政4年(1821年)3月4日、元服。又三郎忠方と名乗る。同7年(1825)11月21日、将軍・徳川家斉の偏諱を受け、齊彬と改める。従四位下侍従兼兵庫頭に叙任。天保3年(1832)5月18日、豊後守に遷任。侍従如元。天保5年(1834)12月16日、左近衛権少将に転任。豊後守如元。天保14年(1843年)2月9日、修理大夫に転任。左近衛権少将如元。

□その後、齊彬は、文政9年(1826)一橋徳川家当主・徳川斉敦の娘である恒姫(栄樹院)(1805～1858)と婚約。恒姫は、文化12年(1815)江戸高輪の島津邸に入り、文政9年(1826)世子齊彬に嫁ぐ。

□齊彬が藩主に就任となれば、重豪のように公金を湯水のごとく費やし藩財政の困窮に一層の拍車をかけかねないと、特に藩上層部に心配され、齊興は齊彬が40才を過ぎててもまだ家督を譲らなかった。そして、家老・調所広郷^{しやうひろさへ}(笑左衛門)や齊興の側室・お由羅の方らは、お由羅の子で齊彬の異母弟に当たる久光の擁立を画策した。齊彬派側近は、久光やお由羅を暗殺しようと計画したが、情報が事前に漏れて首謀者14名は切腹、退役謹慎14名、遠島9名が処分された。『南島雑話』『遠島日記』を記した名越左源太^{なごや さげんた}(1820～1881)の他、高崎正風^{たかさき まさかぜ}(1836～1912)も、このお由羅騒動に連座して奄美大島へ遠島処分を受けた。

齊彬派の4人が必死で脱藩し、齊興の叔父にあたる筑前福岡藩主・黒田齊溥^{なりひろ}(長溥^{なが})(1811～1887)に援助を求めた。齊溥の仲介で、齊彬と近い幕府老中・阿部正弘、伊予宇和島藩主・伊達宗城、越前福井藩主・松平慶永(春嶽)らが事態収拾に努めた。こうして嘉永4年(1851)2月に齊興が隠居し、齊彬が第11代藩主に就任した。この一連のお家騒動は「お由羅騒動」(あるいは高崎崩れ)と呼ばれている。

□齊彬は、藩政改革・富国強兵策を推進。反射炉や機械制工業を他藩にさがけて経営し、それらを一括して集成館を設立した。集成館は、アジア初の近代洋式工場群のことで、その工場群を中心に、反射炉や溶鉱炉、洋式造船や地雷、水雷、ガラス、ガス灯などを製造し、富国強兵・殖産興業に取り組んだ。また開国の意見を抱き軽輩より西郷隆盛・大久保利通等の英才を抜擢し、明治維新の先駆をなした。その卓越した識見は、松平春嶽より「英明近世の第一人者」と称された。



■**島津久光**^{ひさみつ なりおき} (1817～1887)、第10代藩主・島津斉興 (1791～1859) の五男として鹿児島城に生まれる。生母は斉興の側室・お由羅の方 (江戸の町娘) (1795～1866)。幼名は普之進。

□文政元年 (1818) 3月1日に種子島久道の養子となり、公子 (藩主の子) の待遇を受ける。文政8年 (1825) 3月13日に島津宗家へ復帰し、4月に又次郎と改称する。同年11月1日、島津一門家筆頭の重富島津家の次期当主で叔父にあたる島津忠公 (1799～1872) の娘・千百子 (1821～1847) と婚約し、忠公の養子となる。これを機に鹿児島城から城下の重富邸へ移る。文政11年 (1828) 2月19日に斉興が烏帽子親となり元服、忠教の諱を授かる。天保7年 (1836) 2月、千百子と婚礼の式を挙げる。天保10年 (1839) 11月に重富家の家督を相続し、12月に通称を山城と改める。弘化4年 (1847) 10月、通称を山城から周防へ改める。

□斉興の後継の地位をめぐり、斉彬と忠教 (久光) の兄弟それぞれを擁立する派閥が対立してお家騒動 (お由羅騒動) に発展した結果、幕府の介入を招来し、嘉永4年 (1851) 2月2日に斉興が隠退、斉彬が薩摩藩主となる。島津氏家督の座を争う形にはなったが、忠教自身は反斉彬派に担がれたという要素が強く、斉彬と忠教の個人的関係は一貫して悪くなかった。また忠教は斉彬と同様、非常に学問好きであった。ただ、蘭学を好んだ斉彬と異なり、忠教は国学に通じていた。

□お由羅騒動の際には次期藩主候補と目された。安政5年 (1858) 斉彬が急死すると、久光の実子・忠徳 (茂久、忠義) が本家を相続。しばらくして久光が藩政を補佐する役割となった。斉彬の遺志継承を唱え、藩論を公武合体にまとめた。文久2年 (1862) 千名の兵を率いて上洛する。京都にて挙兵を企てる藩内過激派を寺田屋で鎮圧 (寺田屋騒動)。勅使を奉じて江戸へ赴き、幕政改革を行わせる。しかし、その帰りに藩士が英国人を殺傷 (生麦事件)、翌年に鹿児島湾に來航した英国艦隊と激しい砲撃戦を交えた。その和平交渉で英国と親密となり、留学生派遣や紡績機械等の輸入、技師招聘を行った。また、斉彬の遺志を継ぎ集成館事業を復活させる。元治元年 (1864) 参預会議で徳川慶喜の意見が対立、この頃から幕府と距離を置くようになる。雄藩連合による政権樹立を試みるが、天皇を中核とした新政権樹立に方針を変更した。

■**名越左源太**^{なごやさげんた} (1820～1881)、鹿児島城下の下竜尾町の生まれ、家格は寄合。父は名越盛胤。

□文武に優れ、弓奉行を勤め、弘化4年には赤山靱負や郷田仲兵衛と共に御軍役方掛の物頭となる。しかし、嘉永3年 (1850) 薩摩藩において藩主・島津斉興 (1791～1859) の後継者問題をめぐるお家騒動 (お由羅騒動) が勃発。左源太は首謀者である近藤隆左衛門 (1791～1850)、山田清安 (1794?～1849)、高崎五郎右衛門 (1801～1850) らに密談場所を提供し、自身も計画に加わった。計画が露見したのちに首謀者の大半は切腹を申し付けられたものの、左源太のみは奄美大島への流罪に処される。同年3月27日に鹿児島で乗船した日から記録を始めた『遠島日記』 (『大島遠島録』)、嘉永5年 (1852) 遠島中のまま嶋中絵図書調方を命ぜられて、島中を調べて周り記録した『南島雑話』 (共著) は、当時の奄美大島の実情を詳細に知ることができる。

□安政元年 (1854) に赦免され翌2年薩摩へと帰還する。元治元年 (1864) 8月、藩命を受けて手勢を率い、長州へ出兵する手はずだったが、同年9月に急遽日向国小林 (宮崎県小林市) の居地頭 (現地で執政する地頭) に任ぜられる。慶応2年 (1866) 高岡 (宮崎県高岡町) の地頭に転任、そして慶応3年 (1867) 寺社奉行に就任にする。

■幕府、浦賀奉行に、相模沿岸警備を命じる。

■喪が伏せられた**伊能忠敬** (1745～1818) の『大日本沿海輿地全図』が完成。

■英国捕鯨船サラセン号が浦賀に來航、食料・水・薪ほかを給与される。小田原、川越、白河の三藩及び浦賀奉行 (幕府) 合わせて2,300人が動員される。5月8日、浦賀を去る。

■中国江南の商船 (16人乗) が土佐浦戸に漂着、2月14日、土佐藩では幕府へ届ると共に薪水、食料を与え長崎へ運送させる。

■英国捕鯨船2隻 (インディン号、アン号) 沖合に碇泊、常陸大津浜 (茨城県北茨城市) に2艘の解で11名上陸したが藩兵が捕らえ留置する。幕府で調査の結果、水と野菜の調達が目的だと分かり、是らを与え、6月12日、退去させる。

■英国捕鯨船、トカラ列島に属する薩摩藩領宝島に上陸し、牛を望んだが断り、代わりに野菜等与えたが再度上陸して牛を殺して肉を運ぶので、薩摩藩警備員が一名射殺すると死体を残して逃げ去る。閏8月11日、幕府に届ける。

文政7	8月16日	■島津斉彬母・周子(1792～1824)、死去。享年34。 □弥姫(周子)は、寛政3年12月28日江戸の鳥取藩邸で誕生した。父は鳥取藩主池田治道(1768～1798)、母は仙台藩第7代藩主伊達重村の娘・生姫(嗽子)(1772～1792)。その後の弥姫は薩摩藩主・島津斉興(1791～1859)と婚約、池田家から島津家へ輿入れした。弥姫は嫁入り道具として「四書五経」、「左伝」、「史記」、「漢書」を大量に持ち入り、薩摩藩の奥女中や家臣らを驚かせたという。生姫は、寛政2年(1790)3月26日、因幡鳥取藩6代藩主池田治道の夫人となった。 □弥姫は文化6年に、斉興の長子として斉彬を出産。正室の初子が男児である事は、諸藩に誇れる事でもあったため、弥姫の男児出産は薩摩藩に大いなる喜びをもたらした。その後も文化8年(1811)に池田斉敏(1811～1815)に候姫(1815～1880)、文化14年(1817)諸之助、文政2年(1819)に珍之助を生む。諸之助、珍之助は早世したものの、息子の斉彬、斉敏、娘の候姫は無事成長した。後に二男の斉敏は、実家の親戚筋の岡山藩主家・池田家を継ぐ。 □弥姫はかなりの才女であり、和歌や漢文の作品を多く残している。また、薩摩藩の家臣から「賢夫人」と称され、尊敬されるようになる。子育ても乳母に任せず、自ら母乳を与えて、自身が得意である「左伝」、「史記」、「四書五経」を子供たちに自ら説いて聞かせていたという。この教育が功したのか、後に斉彬と斉敏は「名君」と称され、候姫も母と同じく「賢夫人」と称され、家臣、領民から尊敬されるのである。しかし、斉彬をはじめとした子供たちは子息に恵まれなかった。他方、斉興の側室お由羅の方が産んだ忠教(のちの島津久光)は順調に成長した上、多くの子息をもうけたこともあり、後に弥姫の子・斉彬と、お由羅の子・忠教との間で家督争いが勃発し、「お由羅騒動」に発展して行く。 □お由羅は正室・弥姫が無くなると、以後は「御国御前」と呼ばれて正室同様の待遇を受けたという。	0012
10月15日	■島津邦丸(1809～1858)、江戸城で將軍徳川家斉に拝謁、 斉彬 と改名。	0013	



有馬新七居宅跡

文政8	2月6日	■ 郁姫 (1807～1850)、 近衛忠熙 (1808～1898)と結婚。 □忠熙と婚約した頃は、父・斉宣は隠居の身であったため、藩主の兄斉興の養女となり、名も郁姫から島津興子に改めて近衛家に嫁ぐこととなった。この輿入れの際に、上臈として郁姫に随行したのが幾島(当時は藤田)(1808～1870)である。	0014
	2月18日	■ 幕府、異国船打払令発令 。 □露国船、英国船渡来によるトラブルの為、終に幕府では異国船無条件打払令を出す。但し、中国船や朝鮮・琉球等船・和蘭は対象外であった。	0015
	11月4日	■ 有馬新七 (1825～1862)、薩摩藩伊集院郷の郷士・坂木四郎兵衛の子として薩摩国日置郡伊集院郷古城村(鹿児島県日置市伊集院町古城)で生まれる。 □文政10年、父が城下士の有馬家の養子となったため、新七もそのまま城下士となり、鹿児島城下の加治屋町に移住。6才にして漢籍学び始める。同じく薩摩藩伊集院郷の郷士坂木六郎は叔父にあたり、達人として有名であった六郎から幼少期から神影流を伝授された。天保9年(1838)14才の元服の頃より、『靖献遺言』を研究し、崎門学派の学を修める。16才にて藩校造士館書役を命じられるものの拒否。閉門に処せられ、古事記研究に没頭。 □天保14年(1843)19才より江戸で学ぶ。山崎闇斎派の儒学者・山口管山の門下。21才のとき薩摩に帰国。 安政4年(1857)薩摩藩邸学問所教授に就任。文久元年(1861)藩校造士館訓導師に昇進。翌年からは尊王攘夷派の志士達と多く交流して水戸藩と共に井伊直弼暗殺(桜田門外の変、安政7年)を謀ったが、自藩の同意を得られなかったため手を引き、結果的に水戸藩を裏切る形となった。万延元年(1860)町田久成(1838～1897)の要請を受け、伊集院郷石谷村(鹿児島市石谷町)を統治することとなった。新七は石谷村を治める間に、村における刑法を定め、悪事を働くものに罰として石坂と呼ばれる道の建設にあたらせたり、郷士に五人組制を実施するなどの指導を行った。 □その後も過激な尊王攘夷活動を続け、同志達と共に寺田屋に集っていたところを、同じ薩摩藩士らによって肅清された(寺田屋騒動)。この際、小刀が折れて相手の道島五郎兵衛の懐に入り壁に押し付けた状態で橋口吉之丞(1843～1868)に、「俺ごと刺せ」として最期を遂げた。享年38。有馬新七は生涯に三度結婚。三度目の妻との間に一男一女。事件後有馬家は士身分の剥奪、長男幹太郎は親類預かりとなったが、元治1年(1864)には士籍復元。 明治24年(1891)12月17日、明治政府より贈従四位。	0016
	11月6日	■ 大山綱良 (1825～1877)、鹿児島城下高麗町に樺山善助の次男として鹿児島に生まれる。幼名は熊次郎。 □嘉永2年(1849)12月26日に大山四郎助の婿養子となる。家禄136石。通称は正圓、角右衛門、格之助。天保5年(1834)御数寄屋御茶道にて茶坊主として島津家に仕えた。剣は自顕流・薬丸半左衛門兼義(1806～1878)に学ぶ。薬丸門下の高弟中の高弟であり、奥伝である小太刀を極めたといわれ、藩中第一の使い手といわれた。綱良は、西郷隆盛、大久保利通らと共に精忠組に所属。 □島津久光の上洛に随行し、文久2年(1862)の「寺田屋騒動」では、奈良原喜八郎(繁)(1834～1918)らと共に過激派藩士の肅清に加わり、事件の中心的役割を果たした。特に寺田屋2階には大山巖(1842～1916)・西郷従道(1843～1902)・三島通庸(1835～1888)らがいたが、皆で説得を行った結果、投降させることに成功した。翌3年の薩英戦争では、軍賦役として参戦。慶応2年(1866)大宰府の三条実美ら五卿を警固し、大久保と共に薩摩藩の代表として長州に赴き薩長同盟を締結する。	0017

文政8	11月9日	■ ^{とくのうりょうすけ} 得能 良介 (1825～1883)、鹿児島 の城下新屋敷にて薩摩藩士・得能直助の長男として生まれる。	0018
		□誕生2ヶ月前に父は急死していた。そこで藩は、母の吉（阿吉）及び直助の母・藤に良介の養育を命じた。嘉永5年（1852）5月御側御用人座書役なり、安政2年（1855）1月～安政4年（1857）4月まで江戸藩邸詰となった。島津斉彬・久光に近侍して、文久2年（1862）の久光の上洛に随行。その後、明治元年（1868）まで小松清廉（帯刀）や大久保利通、西郷隆盛と結び、国事に奔走。慶応3年（1867）には長崎御付人格として長崎に駐在した。	

文政9	3月4日	■長崎出島商館長一行、江戸に入り島津重豪と斉彬に面会。	0019
	9月27日	■ ^{いじ ちさだか} 伊地知貞馨 (1826～1887)、薩摩藩士堀右衛門の三男として生まれる。初名は貞通、幼名は徳之助。別名は、堀又十郎、堀仲左衛門、堀次郎、堀小太郎、伊地知壮之丞。	0020
		□嘉永3年秋、藩主・島津斉興の中小姓になる。斉興に従って江戸に行き、昌平黉に学ぶ。西郷隆盛が出府すると、ともに広く志士と交わり国事に奔走する。薩摩藩の少壮藩士による精忠組（精忠組）の旗揚げに加わる。安政6年（1859）有村雄助・次左衛門兄弟らと共に水戸藩士と結んで、井伊大老襲撃を計画を謀ったが、帰国の藩命を受けて、井伊大老の襲撃に参加できなかった。藩主の父として実権を握る島津久光は、過激に陥りがちな精忠組の取り込みを図り、側近として拔擢。堀も御小納戸役に任命された。この後、藩地と江戸の間を往復して、久光の公武合体運動を助ける。当初は大久保利通と並ぶ久光側近として、京都・江戸などで他藩との交渉などに活躍。文久元年（1861）10月、藩命により次郎と改名。同年12月、幕府改革を目指した久光の出兵計画（後に文久の改革に繋がる）の準備のための時間稼ぎを行う必要があり、藩主・島津忠義の参勤を遅らせるための奇策として、国元からの指示で江戸藩邸を自焼させた。同年12月7日のことである。この「火災被害」により、忠義は江戸出府の遅延を差し許された。	
		□文久2年（1862）4月には再び藩命で小太郎と改名（島津久光の通称が三郎であったことから、次郎の通称を避けて）。が、文久2年8月3日、幕府によって薩摩藩の自作自演であることが発覚。この際に藩命により伊地知壮之丞に改名。主犯格とされた伊地知は10日、藩の船天祐丸により江戸から鹿児島に檻送された。文久3年、薩英戦争の際、伊地知正治と共に英艦との交渉に当たる。慶応2年（1866）京都において当番頭勝手方掛となる。慶応年間には、薩摩の英・蘭との貿易交渉に従事する。明治元年（1868）参政に任じ藩政改革に従う。	

文政10	3月15日	■ ^{みちひろ} 岩下方平 (1827～1900)、薩摩藩士・岩下亘の長男として鹿児島城下の下加治屋町に生まれる。その後、岩下典膳道格の養子となるという。通称は左次右衛門。	0021
		□薩摩藩の上士階級である家老格の寄合交の家柄で、安政の大獄の最中の安政6年（1859）江戸で水戸浪士と提携し、大老井伊幕政の打倒を図ったが挫折して帰藩する。同年11月、精忠組に参加、大久保利通らと共に指導的な役割を担う。文久元年（1861）側役人兼軍役奉行。文久2年「生麦事件」では、家老代として英公使と交渉する。文久3年（1863）9月、薩英戦争の和平交渉の正使補佐として交渉を担当する。慶応元年（1865）大目付、さらに家老を勤める。	
		□慶応2年（1866）幕府が長州再征につき薩摩藩に出兵を命じた時、征長の名義が判然としないとして出兵を拒否。同年11月、パリ博覧会使節兼博覧会御用として野村宗七（盛秀）（1831～1873）や市来政清（正之丞）ら藩士等9人を率いて出航、翌年のパリ万博に、「日本薩摩琉球国太守政府」の名義で出品し、外交面で幕府に対抗した。慶応3年9月に帰国の際には、シャルル・ド・モンブランと数人のフランス人技術者を伴った。同年11月、藩主島津忠義の率兵上洛に従って上京。小松帯刀や西郷隆盛、大久保利通と共に藩政をリードし倒幕活動に尽力した。	
		□慶応3年（1867）12月、王政復古の大本令では、徴士参与として小御所会議に参席。明治元年（1868）1月には、「神戸事件」紛争処理に活躍。同年2月、外国事務局判事、刑法官出仕、留守次官。明治2年（1869）9月、維新の功として永世賞典禄1000石を下賜された。	
	10月6日	■ ^{しげの やすつぐ} 重野安繹 (1827～1910)、薩摩国鹿児島郡鹿児島近在坂元村生まれる。父は薩摩藩郷士。	0022
		□天保10年（1839）藩校・造士館に入学。嘉永元年（1848）江戸・昌平学の生徒になり、 ^{しおの やとういん} 塩谷宕陰（1809～1867）、安井息軒（1799～1876）などに学ぶ。安政3年（1857）薩摩に帰国するが、同僚の金の使い込みにより奄美大島に遠島処分 にされ、その先で西郷隆盛と出会った。重野は西郷に、漢籍を学ばせ、漢詩を教えた。文久3年（1863）に赦免されて薩摩に戻り、翌元治元年（1864）造士館助教となり、島津久光の命で『皇朝世鑑』の編集にあたる。文久3年（1863）岩下方平らと共に薩英戦争の戦後処理に辣腕を発揮し、維新後は外務職を勧められたが学界に進んだ。	
		□重野はいう。「西郷が尊敬した人物は、鹿児島では山内作次郎や関勇助など秩父党の遺老で、これらを変尊敬していた。外では藤田東湖、大久保一翁、勝安芳（海舟）、これは「天下の人傑」と言っていた。	
		□西郷が親しいのは、学者では、安政の大獄の対象ともなった京都の陽明学者・春日讃岐守（潜庵）。朋輩では、大久保一蔵（利通）、吉井幸輔（友実）、税所篤、得能良介、伊地知正治らであるという。	

西暦1827

文政10 11月5日

■**税所篤** (1827～1910)、薩摩藩士・税所篤倫の次男として生まれる。通称喜三左衛門、長蔵。実兄の篤清(乗願)が、吉祥院住職・真海として島津忠教(久光)の寵遇を受ける。

□藩主・島津斉彬に認められて勘定所郡方、次いで三島方蔵役に任じられた。改革派である精忠組の中心メンバーとして西郷隆盛や大久保利通、吉井友実らと行動を共にする。幕府が和蘭海軍士官を招いて長崎海軍伝習所をつくると、斉彬は薩摩藩から十数名の藩士を選抜して派遣しているが、税所もその内の一人に選ばれる。同じ薩摩藩からは川村純義や五代友厚なども派遣されていた。

□安政5年(1858)11月、西郷隆盛が僧月照と共に鹿児島湾に入水した際、蘇生した西郷が意識を取り戻すまで、枕頭にて看病を行う。その後西郷が奄美大島に流されると、税所は手紙を通じた情報交換や生活物資の援助等を行い、西郷の奄美大島潜伏生活を支援し続けた。月照の四十九日法要は吉祥院で営まれ、以来しばしば吉祥院は有志たちの密談所として利用された。江戸勤番を勤めていた頃、国学者平田篤胤の開いた平田塾の門下生であった税所は、篤胤の著書『古史伝』を新刊刊行のたびに江戸より薩摩へ取り寄せていたが、この書に精忠組同志であった大久保一蔵(利通)の建白書と精忠組の名簿を差し挟んだうえて、兄乗願を通じて久光に献上した。これは大久保の士格が低く、藩規により久光に謁見することができなかったため、大久保の存在を久光に紹介するための策として行われたものであった。こうした税所の助力を通じて大久保は、久光の知遇を得ることとなり、基の相手もし、以来藩の要職に抜擢されることとなる。万延元年(1860)には税所自身も二之丸御用部屋書役に抜擢され、久光の側近としてその信任もますます厚くなった。奄美大島に流されていた西郷の召還が実現したのは、久光の信任を得ていた大久保や税所らの進言に依る所が大きい。

□元治元年(1864)7月19日、「禁門の変」では小松清廉(帯刀)率いる薩摩軍の参謀として一隊を率いて参戦、3発の銃弾を浴びる重傷を負いながらも、長州藩の敵将・国司親相の部隊を退却させるなど武功を上げた。禁門の変以後は、西郷の片腕として活躍、第一次長州征伐の際には、薩摩への怨嗟が激しかった長州へと西郷隆盛、吉井友実と共に三人で赴き、岩国で長州方代表の吉川経幹(監物)を説得して長州藩三家老の処分を申し入れるなど、長州藩の降伏における処理に務めたほか、交流のあった中岡慎太郎らと協力し、五卿の筑前遷移に当たった。「戊辰戦争」では鳥羽・伏見の戦いにおいて大坂の薩摩藩邸が旧幕府軍に包囲された際、自ら藩邸に火を放ち、その隙に保管してあった藩金三万両を抱えて脱出、そのまま京都に向かうが、すでに旧幕府軍の首魁徳川慶喜は東奔した後であった。税所は三万両の藩金を西郷に預け、東征の為の軍資金とした。その後は大坂にあって新政府軍の軍事費などの財政処理を務めた。



西郷隆盛誕生地



給御門

西暦1827

12月7日

■**西郷隆永(西郷隆盛)**(通称は吉之助)(1828～1877)、鹿児島城下下加治屋町山之口馬場の薩摩藩・御勘定方小頭(禄47石余)の西郷九郎隆盛(西郷吉兵衛隆盛)(1806～1852)の家に長男として生まれる。幼名は小吉、通称は吉之介、善兵衛、吉兵衛、吉之助と順次変えた。弟小兵衛(?～1856)は、薩摩藩邸御込敷御用人・大山綱毅(?～1834)の養子となり、大山綱昌(彦八)となり、大山成美(彦八)(妻は隆盛女安)(1835～1876)、大山巖(1842～1916)らをもうける。

□西郷家の家格は御小姓おこしょうみと云う下級武士であるが、城下士じょうかしの中では上位の1割から2割には入っていた。母の名は西郷マサ(政子)(椎原権右衛門女)。西郷家は西郷隆盛の下に弟3人妹3人がおり、祖父母を加えた11人暮らしだが、雨が降ると雨漏りがひどく、1つの布団に兄弟が足を突っ込んで寝るような暮らしであったようだが、隆盛は体格も良く相撲が強かったという。一方で幼少より読書を好み、郷中制度の教育を受け、大久保利通らと薩摩藩校・造士館に通い、とくに陽明学を修め、福昌寺(島津家の菩提寺)の円了無参和尚からは禅を学んだ。天保10年(1839)郷中仲間と月例のお宮参りに行った際、他の郷中と友人が喧嘩となった為、仲裁に入ったが、上組の郷中が抜いた刀が西郷の右腕内側の神経を切ってしまった。隆盛は3日間高熱にうなされたというのが一命は取り留めた。このケンカで右ひじを完全に曲げることが出来なくなり、武術を諦めて学問で身を立てようと志すようになる。隆盛は喫煙者だったが、酒は弱く下戸だげこという。天保12年(1841)元服すると「西郷吉之介隆永」と名乗った。この頃に加治屋町郷中の二才組にせぐみに昇進している。

□弘化元年(1844)17才のとき郡奉行・迫田利濟(1786～1855)の配下に加わると、郡方書役助こおりかたきやくたすけ(農村年貢取立て役所の書記見習い)を務め農政に従事し、のちに藩農政に関する建白書を書いて藩主の目にとまり、御小姓おこしょう与(一番組小与八番)に編入された。弘化4年(1847)郷中の二才頭にせがしらに就任。23才頃、伊藤茂右衛門に陽明学を、無参和尚に禅を学ぶ。嘉永3年(1850)3月4日、「高崎崩れ(お由羅騒動)」で西郷家の縁が深かった赤山靱負(1823～1850)が切腹。父が赤山靱負の御用人であった為、介錯した父から血に染まった衣と切腹の様子を聞いたという。これに衝撃を受けると、藩政改革するため世子・島津斉彬(1809～1858)の襲封を願うようになり、赤山靱負らの遺志を継いで、「近思録崩れ」の秩父季保愛読の「近思録」を輪読する会を、大久保正助(大久保利通)・税所喜三左衛門(篤)・吉井仁左衛門(幸輔、友実)・伊地知竜右衛門(伊地知正治)・有村俊斎(海江田信義)らと結成した。のちには精忠組(誠忠組)へと発展している。そして薩摩藩士として島津斉彬のもと、頭角を現す。

□薩摩藩の盟友、大久保利通(1830～1878)や長州藩の木戸孝允(桂小五郎)(1833～1877)と並び、「維新の三傑」と称される。維新の十傑の1人でもある。

□加治屋町は、明治維新に活躍した偉人達を多く輩出した町。西郷隆盛・従道、大久保利通、伊地知正治、吉井友実、大山巖、村田新八、黒木為楨、井上良馨、篠原国幹、山本権兵衛、東郷平八郎など。

あとがき

この本は、約200年続いた鎖国から一挙に開国を迎え、王政復古までの時代を切り取り、その軌跡を薩摩藩中心に追ってみようと企画いたしました。編集に当たって、鹿児島県大阪事務所様や鹿児島市様、鹿児島市観光交流局明治維新150年・西郷どん推進室様などから写真のご提供を受けました。詳細な年表掲載し、時代の風景・幕末の時代を垣間見て頂けましたら幸いです。

編集にあたり、別記参考図書や自治体・各団体WEB等、大いに活用させていただきました。しかし、資料による違い、異説、物語などあらゆる事項があり、すべては、弊社の編集責で掲載しております。

最後になりましたが、ご協力いただきました取材先様、スタッフの皆さまに、厚く御礼申し上げます。

その時、勤王志士・朝廷、慶喜政権、江戸幕府らは、 西郷隆盛・大久保利通・薩摩藩年表帖 上巻 ペリー来航から王政復古まで、時系列でわかる！

第1版第1刷

発行日 2018年1月1日

年表 ユニプラン編集部

編集 ユニプラン編集部(鈴木正貴 橋本豪)

デザイン 岩崎宏

発行人 橋本良郎

発行所 株式会社ユニプラン <http://www.uni-plan.co.jp>

(E-mail) info@uni-plan.co.jp

〒604-8127 京都市中京区堺町通蛸薬師下ル 谷堺町ビル1F

TEL (075) 251-0125 FAX (075) 251-0128

振替口座／01030-3-23387

印刷所 為國印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-89704-443-9 C0021